

熊本ほいく未来塾×子ども家庭福祉学科

熊本県保育協議会（県下 420 園の保育所が加盟）とコラボレーションし、「熊本ほいく未来塾」を10月4日（金）に開催しました。

熊本県保育協議会会長の本藤潔先生（菊池さくら保育園園長）、総務委員長の坂本武範先生（水俣みどりの森こども園園長）、保育士部会長犬童れい子先生（合志小羊保育園副園長）に本学にお越しいただき、保育者を志す在学生と、熊本の保育を発展させていくための保育・幼児教育の課題や展望について語り合いました。

保育士の仕事は AI にとって代われるものではなく、人と人が心と言葉と関係性を紡いでお互い成長し合う職業です。保育者を目指す真摯な学生さんの声と笑顔が未来の園や子どもたちを作っていきます。これからも熊本県保育協議会と協働し、『熊本のほいく』を盛り上げていければと思います。

子ども家庭福祉学科 学科長 栗原武志



今回、「熊本ほいく未来塾」に参加して、自分が子どもたちにどう接していきたいかを再確認できたように思います。また、周りの友達の考えを聞いていく中で、その人の考えを知ることができ、共感することも多くありました。

私は子どもと関わる中で、子ども一人ひとりのことをよく知るということを大切にしたいと思います。これは、現場の先生方が日常の保育の中でされていることだと思いますが、子どもたちのことを知っておくことで、簡単すぎず、難しすぎず、“ちょっとだけ難しい”制作や遊びを保育の中で設定することができると思うからです。また、子どものことを知っていることで、一人ひとりの発達の違いを見極めて、適切に援助できると考えます。また、子どもの行動の背景にある、様々な理由や気持ちにも目を向け、受け止め

私がしたくないと思う保育は、子どもに無理やり何かをさせたり、意味もなく大きな声で子どもを叱ったりすることです。私が子どもの頃に通っていた保育園では、給食に子どもが苦手な食材が入っていると、先生が給食室からスプーンを持ってきて、無理やり食べさせられていました。私が3歳児クラスの時には、午睡の時間に寝ていない子どもがいると、先生が注射器のようなものを引き出しから取り出して、「注射するよ」と脅しのようなことを言う担任の先生がいたことを思い出しました。記憶は曖昧ですが、その先生は子どもを叱るときに、おしりを叩くこともあり、「〇〇先生は怖かった」ということだけははっきりと覚えています。わけもなく大きな声で叱ったり、子どもが怖がるようなことを言って、無理やり何かをさせたりしても、「なぜしてはいけないのか」という保育者が本当に子どもに伝えたいことは伝わらず、ただ「怒られて怖かった」という感情が残らないのではないかと思います。だから、私が保育者の立場になった時には、緊急性があるとき以外は大きな声で叱らず、子どもと同じ目線で、落ち着いて話をするのを忘れないようにしたいです。また、子どもが苦手なものを無理やり食べさせても、その子にとって保育園での給食の時間は苦痛な時間になってしまうだけだと思うので、苦手なものは少しずつ食べられるような声掛けができる保育者でありたいです。

〈熊本みらい保育塾を終えての感想〉

今回は、普段の授業では、なかなか聞くことのできない現場の先生方の話を聞くことができ、とても良い学びとなりました。

保育協議会の方からの質問にもありましたが、私のやりたい保育は、子どもたちが遊びなどを通して主体的に活動できる保育です。保育者が、強制的にやらせるものは、遊びではなく、作業のようなものだと思います。子どもたちにとって遊びはとても大切で、遊びを通して、友だちとの関わり方を深めたり、主体性、感性を育んだりすることができるのではないのでしょうか。私は、身体を動かすことがとても好きです。保育者自身も子どもたちの気持ちに寄り添い、一緒に楽しむということも大切にしていきたいと考えています。

私のやりたくない保育は、子どもたちを否定する保育です。子どもたちが不適切な行動をしたときに、注意を促し、正しい方向へと導くことは確かに大切です。しかし、授業でも習いましたが、すぐに、「ダメでしょ。」「～しなさい。」と、禁止や命令の言葉を使うのではなく、なぜその行動がいけないことなのか、自分で考えることができる間を保障することも大切だと思います。子どもたちは、保育者の言葉もよく聞いていて、否定をされてばかりでいると、それが残ってしまい、自己肯定感が低くなってしまったり、友だちにも否定的な声掛けをしてしまったりする可能性も考えられるので、保育者がどのような声掛けや支援をしていくのが大切になると思います。子どもたち一人ひとりの良さや頑張りを認め、褒めるということも大切にしたいです。

また、保育協議会の方々の話の中で印象に残っている言葉は、保育は「Live」ということです。子どもたちの行動は、全て予想できるわけではなく、毎日、様々なことが起こります。子どもたちの行動を予想し、行動することも大切ですが、その時の状況に応じて臨機応変な対応も求められると思います。そのためには、子どもたちの各年齢の発達の特徴を知るとともに、一人ひとりの性格や特徴を捉え、小さな変化にも気づくことができるようにしておくことが大切だと思いました。

子どもたちにとって、幼児期は人格の形成における大切な時期で、二度とやり直しは聞かないし、保護者にとっても大切な存在なので、責任をもつ必要がと改めて感じました。

女性は、結婚や出産を機に仕事を辞めなければいけない雰囲気があるということを知っていたので、そこが、私はとても不安でしたが、先生方の話を聞いて、少し安心しました。自分のやりたい仕事なので、結婚をしても、出産をしても続けたいと思っています。保育士の重要性がもっと世の中の人に知ってもらえたら嬉しいです。

私の、将来像は、子どもたち一人ひとりの気持ちに寄り添い、丁寧な保育をするとともに、子ども同士の関係につなげることのできる保育者になることです。公務員の保育士を目指していますが、まだ全然勉強ができていません。これから、もう一度自分と向き合い、どのような保育者になりたいのか目標をしっかりと持ち勉強に励んでいきたいです。

～「熊本ほいく未来塾」を終えて～

熊本県保育協議会の方々と話す機会を設けて頂き、改めて自分の保育に対する思いを見つめ直す事が出来たとともに、周りの友達も考えている保育観に新鮮さを感じる事が出来ました。

私が考える理想の保育は、乳幼児期はやり直しのきかない大切な時期であるため、人生でとても大事な時期に関わっている事を念頭に置きながら、直接的・間接的関わり・見守る支援・第三（物）を通しての関わりをしていく事です。大学は自分の学びたい所に自分の好きな時期に行く事が出来ます。しかし、人格を形成する乳幼児期は、やり直したいと大人になって思っても、戻る事は出来ません。その大事な時期に重要な役割を果たしているのが、保護者や家庭、そして保育者だと思います。一人ひとりの子どものありのままの姿をまるごと受け止めながら、子どもの主体性や意欲を大切にしていきたいです。また、熊本県保育協議会の方の「いつまでも初心を大切にしたい」という言葉がとても心に残りました。慣れるという言葉は時に、怖く感じる事もあります。慣れ過ぎて、怠ってしまったり、なまけてしまったりするのが一番怖い事です。だから、原点に戻って、初心の心を大切に持ち続けたいと思いました。加えて、「保護者支援はチームワークである」という言葉もとても印象に残りました。保育園は、家庭とともに子どもの成長の喜びを感じ、子どもも保護者も保育者自身も共に成長し合う事が出来る環境が整っています。保護者支援も子どもも、皆で見守り、皆で育ちの喜びや楽しさを共有していきたいと思いました。

周りの友達も保育に対する考えを聞いて、子どもにとって必要不可欠な「遊び」は、子どもの主体性を大切にしていきたいと思いました。子どもは、遊びを通して、想像力・創造力、協調性や危機を感じ取る力等を学ぶ事が出来ます。これらは、自分で体験して、自分で感じ取り、自分で学ぶ経験をすることが重要だと私は考えます。介入し過ぎずに、子どもの世界を壊さずに、見守っていききたいです。また、障害を持った子どもを排除するのではなく、配慮した支援をしたいという考えがとても素晴らしいと感じました。皆が平等であり、一人ひとりに個性があります。その子自身に出来る事を伸ばし、周りの環境を整え、支えていきたいです。

最後に、熊本県保育協議会の方がおっしゃった「砂場は人生の縮図である」という言葉が、とても良いな感じました。多様な面で、様々な事が求められるのが保育園です。多様な面で保育や支援が出来るようにこれまでの学びと、これからの学びを大切にしていきたいです。そして、自分の学びを十分に発揮する事が出来る就職を考えていきたいです。自分の足で、自分の目で園の事を知りたいたいです。また、「比較対象は幸せにならない」という言葉にととても共感しました。周りとは比べるのではなく、自分自身と比べ、成長出来るように努めたいです。